

議会報告・意見交換会のまちづくり委員会との共催の意義について

令和 2 年 12 月 17 日の広報広聴委員会において、議会報告・意見交換会のまちづくり委員会との共催の意義について以下のとおり意見が交わされたため、今後の広報広聴委員会での議論の参考とする。

1 議会報告会の変遷

- ・ 議会報告会の当初、2 回目までは、自治基本条例を説明するために、議員数名で市内 20 地区の市政懇談会に参加して意見交換会を行っていた。
- ・ 3 回目からはブロック制をとって議会報告会を開催した。
- ・ 全地区で開催すると「家の前の道路だけ直せ」というような意見ばかりになると考え、効率性も考えてブロック制が適当と判断した。
- ・ 当初は議会として市民の前に出ていくことに躊躇もあった。
- ・ どのように共通認識をもつのか、①会派制あるいは②議会として共通認識をもつのかという議論があったが、議会として常任委員会ごとに対応していくこととなった。
- ・ 議会だよりを活用して、初めは議会が何をしているのか報告することに重きを置いていたが、テーマ設定をするようになり、現在は市民との意見交換を重視するように変遷してきた。

2 まちづくり委員会との共催について

- ・ 市政懇談会がまちづくり委員会との共催なので、その延長で議会報告会もまちづくり委員会との共催とした。
- ・ まちづくり委員会も議会の常任委員会と同じ分野の委員会をもっているため、常任委員会に関連するテーマを共有しやすいのではと考えた。
- ・ まちづくり委員会連絡会議に参加して感じるのは、10 年前のまちづくり委員会には意識が高い人が相当いたが、現在は成り手不足で充て職のようなかたちになっている。
- ・ まちづくり委員会連絡会議では、コロナ禍の今年を除けば、議会報告会をやめてしまえという声はない。
- ・ 共催の意味を、まちづくり委員会連絡会議でしっかりと説明してこなかった反省はある。
- ・ 毎年のアンケートで「開催してよかった」という声が多いことは、一定の評価をいただいていると解釈してもよいのでは。
- ・ やらされ感をどう払しょくしていくか。今回はフィードバックを丁寧に行っているが、まちづくり委員会の会長でとどまっている可能性もある。
- ・ 参加している人達までフィードバックができていないとすれば、それが課題である可能性もある。
- ・ 全国の他議会と異なり、飯田市議会がまちづくり委員会と共催して、議会報告会を起点として、各委員会がテーマを持ちながら政策形成サイクルをもっているということは、市民の皆さんに伝える必要があるのではないか。

- ・ 現在は住民自治の原点であるまちづくり委員会に視点を置いて地域の住民自治に関する政策議論となっているが、市の政策全般に関する政策議論をするということであれば、まちづくり委員会に限らず、政策に関連する団体との議論でもよいかもしれない。
- ・ 3月のまちづくり委員会連絡会議で、共有するテーマの投げかけをしてもよいかもしれない。
- ・ 必要性、効果性については検討の余地があるが、まちづくり委員会との共催の意義はある。
- ・ 手始めとしてテーマ設定についての意見をいただくことで、内容、必要性、効果性などに議論が進んでいくのではないかと。
- ・ テーマ設定などをまちづくり委員会が行うのが市政懇談会、動員だけはまちづくり委員会が行い、あとは議会任せというのが議会報告会という性質がある。
- ・ 政策的な主導権は議会が持ちながら、テーマ設定などについてまちづくり委員会に意見を聞くのもよい。
- ・ まちづくり委員会の負担感を実際に調査してみてもどうか。
- ・ 一議員として市民の意見を聞くこと、常任委員会として様々な団体と意見交換を行うことは重要。
- ・ ごみの問題について、総務委員会が20地区の担当者から意見を聞くなどの方法も許容されている。
- ・ 2年で1サイクルと考え、言いたいけれど言う場所がない人の声を拾うために「タウンミーティング」を開催することとし、市民の意見を聴いて返すという姿勢は貫いている。
- ・ 「現場主義と対話」をどのように整理するかは、乗り越えなければならないハードルの一つとなっており、共催をどのように捉え直すかという議論につながる。

3 これからの議会報告・意見交換会をどうするか

- ・ 以下の3つの考え方がある。
 - ① 何も変えず今までどおり開催する。
 - ② 分科会のテーマをまちづくり委員会と共に開催する。
 - ③ まちづくり委員会との共催をやめて議会が自主的にブロックを決めて開催する。
- ・ 上記以外にも、地区別に開催するか、常任委員会単位で行うべきか、議員全員参加か、時期はどうするか、年2回開催すべきかなどの切り口がある。
- ・ 何のために議会報告会を開催するのか、その目的のためにどのように開催するのかを議員全員で検討すべきではないか。
- ・ 議会報告会には以下の2つの性格がある
 - ① テーマを設定せずに不特定多数の市民と意見交換する方法
 - ② 議会が行おうとしている制度、仕組みなどについて常任委員会単位で議論し合う方法
- ・ 広聴プロジェクトは、「市議会として市民の声を聞く」という視点で整理した。
- ・ 政策議論をしていく、総合計画、分野別計画などについて議論をしていくということであれば、議会報告・意見交換会のやり方が見えてくる。
- ・ 最終的に政策提言につなげるために、まちづくり委員会とどのように関わっていくかという視点も必要。

4 議会報告・意見交換会の問題点

- ・ 議会としては、市民の皆さんの意見を聞きたいし、行ってきたことを報告したいとの思いがあるが、まちづくり委員会としては参加者を集めなくてはいけないというような負担感を感じており、そのズレが問題になってきている。
- ・ 議会とまちづくり委員会の双方が、開催して良かったというようにもっていくにはどうすれば良いか。
- ・ 龍谷大学の土山先生が言っていたように、参加者である市民が何か得ようとするもの、ワクワクすることがないと市民の参加は難しいのではないかと。
- ・ 他市の議会報告会の悩みは、参加者が集まらないこと。飯田市はまちづくり委員会との共催により、参加者の問題はクリアしてきた。
- ・ ただし、本当にまちづくり委員会との共催であったかどうか、人集めの協力というイメージで進められてきたのは確か。
- ・ 議会報告会が毎年開催されるイベントと化してきて、内容の振り返りが薄かった。
- ・ 参加者の立場でのメリット、インセンティブを考えることが必要。
- ・ 市民から意見を聞くことは、議会のあり方に直結する重要な事項。
- ・ 佐藤市長のあいさつの中で、「対話による心の通う行政を進める」「市民の声を議会に届けてほしい」とあったが、市民の意見を迅速に吸収して行政に反映していくかは、議会と行政との競争になっていく。
- ・ 広聴機能の強化により政策サイクルを回すという中から、議会報告・意見交換会を開催し、常任委員会でも調査研究し、タウンミーティングでも意見を把握するという観点で進んでいる。
- ・ 一般的な市民にとって、議会報告会と市政懇談会は同じ位置づけとなっている。
- ・ 最近の市政懇談会は要求型から提案型になっているが、議会報告・意見交換会をどのように位置づけるか。
- ・ そのものの議会報告・意見交換会の位置づけを市民の皆さんにお示しする必要があるのではないかと。

5 今後の方向性について

- ・ 議会報告・意見交換会を起点とした2年間の政策サイクルを構築していく中で、ブロック単位で開催して得た市民からの意見等をまちづくり委員会に返していくことは、広聴機能の強化につながり、市民の声を反映した政策づくりの礎となる。
- ・ そこで、従来と同じくまちづくり委員会との共催という形式を大切にしながら、議会として現状で考えている開催テーマをブロック単位でまちづくり委員会と相談し、開催するものとする。開催後は、できるだけ速やかな市民への回答、予算決算審査を通じた調査研究、市民との意見交換に基づく政策立案等の磨き上げを行い、必要に応じて「新たな広聴の場」であるタウンミーティング（仮称）を活用して広聴機能の充実を図りながら、まちづくり委員会との共催による議会報告・意見交換会を継続して開催していく。